

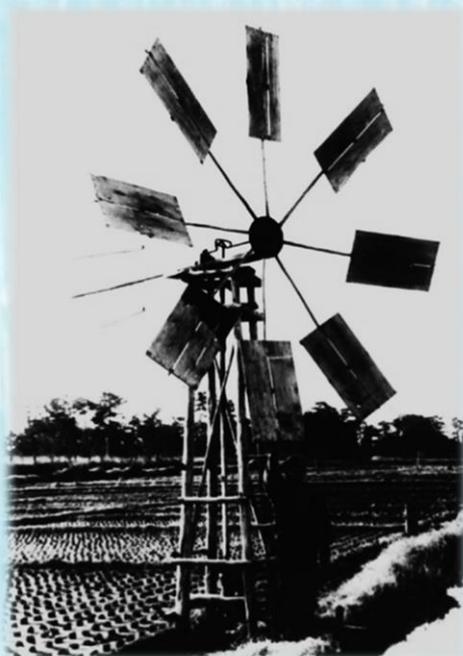
豊川用水のはじまり

～ いつからあるの？ ～

○豊川用水の通水前

東三河地域は、太平洋岸の日本の中央部に位置し、東西に大都市を抱える有利な立地条件や気候が温暖なことから、古くから農業がさかんに行われてきました。しかし、川の水を使えるところが少ないため、多くの農家が作物を育てるのに大変な苦勞をしていました。

また、酸性土壌でやせた土地が多く、麦、サツマイモなどの水が少なくても育つ作物しか作れませんでした。



風車による田への水汲み



ため池から水汲み



牛車による水運搬

当時の生活は、炊事や洗濯、風呂などに使う水を、共同井戸や雨水に頼っていました。雨水は、各家で軒下に貯水槽（トイタキ）をつくり、そこへ溜めて利用していました。



雨水を溜めるトイタキ



共同井戸の水で洗濯

○豊川用水のはじまり

この地域に豊川の水を引こうと考えたのが**近藤寿市郎**です。大正11年、視察先のインドネシアでの農業水利事業をヒントに着想しました。豊川上流の鳳来町（現新城市）にダムをつくり、貯めた水を東三河地域に導水するというもので、これが豊川用水の構想が誕生した瞬間です。

※近藤寿市郎(生:明治3年 没:昭和35年)衆議院議員、県議会議員、豊橋市長などを歴任。

寿市郎は、この構想の実現に向けて動き出します。初めは大ボラと一笑されるだけでしたが、地域の人びとを説き、国、県へ精力的に働きかけを行いました。

こうした活動が実を結び、昭和2年に国により豊川用水の計画がつくられましたが、財政難や戦争のため実現が困難な状況が続いていました。

赤岩山緑地に立つ近藤寿市郎像



しかし、戦争が終わり食糧増産の時代となり、地域開発の気運が高まり、昭和22年に県、市町村が一体となって東三地方開発期成同盟会を結成。国へ働きかけを行い、ついに**昭和24年に豊川用水の建設工事**がはじまります。宇連ダムの着工を皮切りに、昭和33年には農業用水と併せ、水道用水と工業用水にも給水する総合開発計画となり、渥美半島、蒲郡市、静岡県湖西市まで水を送る水路や調整池が、多くの人の努力と長い年月をかけ、**昭和43年に完成**しました。



宇連ダム定礎式



工事中の宇連ダム



東部幹線水路工事（サイホン）



大野頭首工で行われた通水式（昭和43年）

○次回は、豊川用水通水による**東三河の発展**について、「農業、工業、上水道」の分野ごとに紹介します。